

中等教育研究開発室年報 第34号 (2021年3月31日発行) 別冊電子版
2020年度 授業実践事例

英語科 SAGAs 高等学校第Ⅱ学年

How to Make Yourself Understood 分かってもらうには
一言語コミュニケーションにおけるミスコミュニケーションを避ける—

授業者 山岡 大基

(校内研究授業)

広島大学附属中・高等学校

SAGAs 学習指導案

指導者 山岡 大基

日時	令和3年1月7日(木) 第6限 14:20~15:10
場所	高校Ⅱ年1組 HR 教室
学年・組	高校Ⅱ年1組 40人(男子22人 女子18人)
単元	Chapter 1 How to Make Yourself Understood 分かってもらうには <i>Critical Communication</i> (本校オリジナル教材)
目標	科学的・論理的なコミュニケーションを成り立たせるための責任ある言葉の使い方について意識を高める。

指導計画 (全1時間)

第1時 言語コミュニケーションにおいて陥りがちなミスコミュニケーションについて考える。(本時)

授業について

「GS クリティカルコミュニケーション」は、1・2学期は国語科教員が担当し、科学論文における言語使用について理解を深めたり、プレゼンテーションの技能を高めたりする学習を行っている。3学期は英語科教員が担当し、プレゼンテーションも含め、英語で科学的・論理的コミュニケーションをする力を伸ばすことを意図した学習を行う。授業においては、1・2学期の学習で、日本語を通じて身につけた科学的・論理的な言語運用力を、科学の世界での国際共通語である英語においても実践することができるよう、具体的な題材を用いてトレーニングを行う。

本年度は、科学的・論理的な思考力のトレーニングをするためのテキスト *Critical Communication* を新たに開発し、使用に供する。このテキストでは、基本的な構成として、不適切な言語使用の例を示して、何が不適切であるかを生徒に考えさせるところから、科学的・論理的コミュニケーションにおいて言語を適切に用いるための考え方や技術の学習を導くことを意図している。

本時の授業は、3学期の第1時であり、生徒にとっては新しい学習を始める時間となる。したがって、まずは上記の学習目標を生徒に認識してもらい、授業の方向性を授業者と生徒で共有することが本時の目的となる。テキストの配付や趣旨説明も行うが、できる限り、最初から具体的な学習活動を通じて、科目の趣旨や学習目標を、生徒が体験的に理解できるように授業を展開したい。

なお、使用言語については、科学的・論理的コミュニケーションを英語で実践できる力を育てるという趣旨から英語を基調とする。しかし、その一方で、不如意な外国語を使用することで認知資源が圧迫され十分な思考ができなくなるというデメリット(外国語効果)もある。その調節弁として、テキストには英文とその和訳を併記し、授業でも、必要に応じて日本語を併用する。

題 目 言語コミュニケーションにおけるミスコミュニケーションを避ける。

本時の目標

1. 言語コミュニケーションにおいて陥りがちなミスコミュニケーションについて考える。

本時の評価規準（観点／方法）

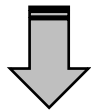
1. 聞き手・読み手が一義的に理解できる言葉を選択的に使用することができる。
(知識・技能／パフォーマンス・ペーパーテスト)

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
1. 趣旨説明	<ul style="list-style-type: none"> ・3学期の授業について概要を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者が簡潔に説明する。
2. 導入 「あいまいな指示」	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者の言う英文を聞いて、その内容を絵で描き表す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>検討英文</p> <p>Put an egg on the rice.</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・状況を具体的に想像させる。
(テキスト配付)	<ul style="list-style-type: none"> ・描き終えたら他の生徒と比較し、異同を確認する。 ・テキストp.4を参照し、検討英文がなぜミスコミュニケーションを生むのかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・定義のあいまいな言葉がもたらす問題を体験的に理解できるように、解釈を狭めるような補足説明は避ける。
3. 説明	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の定義を話し手と聞き手が共有していることの重要性について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Who is to blame?(誰の責任か?)という問いについて、言葉を発した側の責任に意識を向けさせる。 ・Product Liability(製造物責任)とCustomer Perspective(顧客視点)というビジネス概念を比喻として言語使用における留意点を説明する。
4. 練習	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストp.5のSample Argument 1,2を読み、それぞれにどのような問題があるか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SA1…extraterrestrial beingsを「他の惑星に興味のある高度な知的生命体」と思い込んでいる。 ・SA2…相関と因果,あるいは因果の順序を混同している。
5. まとめ		

Chapter 1 How to Make Yourself Understood 分かってもらうには

1. Who is to blame?



(挿絵出典: いらすとや <https://www.irasutoya.com/>)

2. What is the problem?

3. “Product Liability” and “Customer Perspective” in Scientific Communication

Question 1: What is missing in these arguments?

Question 2: How would these arguments look to the readers?

[Sample Argument 1]

Some argue that extraterrestrial beings, or aliens, exist in outer space. I doubt that. If aliens really exist, they should have visited our earth with their “unearthly” technology. At least they should have made contact with us. However, there has never been such a visit or contact so far. Therefore we must say there are no such things as extraterrestrial beings.

地球外生命体, つまり宇宙人が宇宙には存在すると主張する人たちがいる。私はそうは思わない。もし本当に宇宙人が存在するのなら, その「地球規格外」のテクノロジーを使って, 我々の地球を訪れているはずだ。少なくとも, 連絡を取ってきたはずだ。しかし, 今のところ, そのような訪問や連絡はない。したがって, 地球外生命体などというものは存在しないとわざるを得ないのだ。

[Sample Argument 2]

The consumption tax rate should be raised. The government needs money to put its good policies into practice, and the increased revenue from the consumption tax can be used to boost their implementation. Besides, those countries where the consumption tax rates are high are active in their economy. Higher rates lead to a better economy. There is nothing negative in raising the consumption tax rate.

消費税率を上げるべきである。政府は, 良い政策を実行するのにお金が必要で, 消費税からの税収が増えれば, それを, 政策の実行を加速するために使える。また, 消費税率が高い国は, 経済も活発である。高い税率が良い経済へとつながるのだ。消費税率を上げることに, 否定的な面は何もない。

実践上の留意点 (SAGAs「GS クリティカルコミュニケーション」)

3学期最初の授業である。1・2学期は国語科教員が担当してきたので、授業者と生徒は初顔合わせとなる。教材配付、オリエンテーションを含めて、英語科が担当する「クリティカルコミュニケーション」において何が期待されているかを、生徒が実際の学習活動を通じて理解できるように授業を作った。

本時の主眼は、科学コミュニケーションにおいて言葉を自覚的に注意深く用いることの重要性を生徒に気づかせる点にある。

導入では、Put an egg on the rice. という平易な文について、常識的には解釈は容易であると思われるが、言葉そのものの表す意味としては異なる解釈も可能であることを示した。

日常のコミュニケーションは言語的・非言語的な文脈に支えられている部分が大きく、話し手（書き手）は、その文脈を聞き手（読み手）と共有していることを期待して言語を使用する。仮にその文脈が共有されておらず、ミスコミュニケーションが生じたとしても、コミュニケーションの修復を図ることが可能である場合が多い。そのため、言語の経済の観点から、必ずしもすべてを言語化しないのが普通である。

しかし、科学コミュニケーションにおいては、そのようなコミュニケーションの修復が不可能な場合も多く、そもそも内容の面で正確なコミュニケーションが要求されるので、話し手（書き手）は、極力、誤解が生じないように言語を使用する必要がある。日常のコミュニケーションのように、暗黙の裡に話し手（書き手）と聞き手（読み手）が文脈を共有していることを期待するとミスコミュニケーションを生むので、むしろ、双方が文脈を共有していないことを前提に、できる限りのことを言語化する努力が必要となるのである。そのことを可視化するために、極端な例として Put an egg on the rice. を取り上げたのである。

さて、このような、話し手（書き手）としての言語使用に対する責任について、本時では、Product Liability（製造物責任）と Customer Perspective（顧客視点）という商業分野での用語で比喩的に表現した。そのことにより、ミスコミュニケーションが発生したときに、それは、誤解した側ではなく、誤解を許す言語使用をしてしまった側の責任であるという考え方を明確に言い表すことを意図した。

その後、extraterrestrial beings（地球外生命体）と consumption tax rate（消費税率）の例題に対して、Product Liability と Customer Perspective の考え方を適用することにより、それらがなぜ不適切な議論であるのかを言語化する練習を行った。クリティカル・シンキングの学習においては、考え方を理論的に理解することと併せて、その考え方を実際の例に当てはめて「考える練習」を行うことが重要である。しかし、現実世界における例は複数の要因が複雑に絡み合っており、学習の初期段階で用いるには難しすぎることが多い。そこで、本時では、テキストに掲載してある、単純化されたモデルケースを用いることで、考えるポイントを明確にし、生徒が取り組みやすいように配慮した。

ただし、多くの生徒は、考え方そのものを学習の対象とすることに慣れていないため、単純化した事例であっても、どこから考えたらよいかという、いわゆる「糸口」を見つけるのに苦労する。授業者の側で、かなりかみ砕きながら導いてやる必要がある。

